

王昭君説話と琵琶

山本敏雄
Toshio YAMAMOTO

国語教育講座

はじめに

王昭君は匈奴に嫁いたことが『漢書』に見えて以来、詩文から現代の戯曲に至るまで様々な形で悲劇の物語の主人公として語られてきた。『漢書』にはそれほど詳しい記載があるわけではなく、後世、いくつかの要素が付け加えられていったのである。どうして王昭君をめぐるこれほど多くの作品が生み出されたのか、王昭君説話を一つの大きな物語としてとらえ、その構造を総合的に分析することが必要と思われるが、本稿ではひとつの手がかりとして、文学とその背景にある音楽文化との関係という視点から、後に付け加わった重要な要素の一つである楽器である琵琶と王昭君説話との関連に焦点を当て、唐代を中心に時代を追ってその変遷を見てみたいと思う。

次章で述べるように、王昭君説話の基本的な枠組みを示す『漢書』、『後漢書』、『琴操』、『西京雜記』では王昭君と琵琶についての記載は見えないが、例えば、元の馬致遠の『破幽夢孤雁漢宮秋雜劇』は、元帝と王昭君との間に生まれた愛情を重要な主題とし、第一折では、王昭君が漢の後宮において、寂しさを紛らわせるために琵琶を弾いていたところ、元帝がその音色を耳にしたことが二人の間に恋愛感情の芽生えるきっかけとなっている。また、同じく第三折で送別の際に元帝が王昭君の事を思い、「想娘娘那一天愁都撮在琵琶上（彼女は胸一杯の愁いを琵琶に集めることだろう）」と唱う場面がある。王昭君が琵琶を弾くということがこの戯曲においては重要な要素となっているといえよう¹。

では、王昭君説話の中で琵琶はどのようにして現れてきたのか。まず、その説話の成立から見てみよう。

一、王昭君の故事について

王昭君に関する記事については、すでにいくつかの論考で言及されているが、ここで改めてまとめておきたい²。

王昭君の故事が見える史書は『漢書』と『後漢書』である。最初に見えるのは『漢書』巻九、元帝紀と巻九四下、匈奴伝下である。前漢元帝の竟寧元年（前33年）、匈奴内部の争いに際し、漢が呼韓邪単于に援軍を送ったことに対する謝礼に単于が朝廷を訪れたとき、

元帝の出した詔勅に「其改元爲竟寧，賜單于待詔掖庭王樞爲閼氏」（元帝紀）と見える。また、匈奴伝下には「單于自言願婿漢氏以自親。元帝以後宮良家子王牆字昭君賜單于」とある。『漢書』ではこの他にも王昭君に関する記載があるが、全て呼韓邪単于に嫁いで以後のことである。王昭君は伊屠智牙師という男児を一人生み、呼韓邪単于の死後は彼の寵愛していた女性を母に持ち単于を継いだ復株鞮若鞮単于に嫁ぎ、須卜居次、当于居次という二人の娘を生んだということになっている。

『漢書』からは天子に見初められずにいた王昭君が元帝の命に従って呼韓邪単于に嫁ぎ、彼の死後、次の単于に再度嫁いだことと、三人の子をもうけたことが記されている。

一方『後漢書』では巻八九、南匈奴列伝だけに記載がある³。『漢書』と異なる部分に限っていくつかの点を指摘しておこう。

まず、『漢書』では名は樞、字は昭君であるが、『後漢書』では名は昭君、字は嬪となっている。また、『後漢書』において新たに付け加わった事柄として、王昭君だけではなく五人の宮女が呼韓邪単于に贈られたこと、王昭君は元帝に見初められないことに「悲怨」の思いを募らせ、自ら匈奴の地に行くことを申し出たこと、元帝は王昭君が「豊容靚飾」であることに驚き、匈奴に贈ることをためらったこと、王昭君が次の単于に嫁ぐことに抵抗し、漢に戻ることを希望したが、成帝の命により胡俗に従ったことなどが挙げられる。

史書以外には後漢の蔡邕の『琴操』と晋の葛洪の『西京雜記』が唐代以前の王昭君の故事についての記述として知られている。

『琴操』（『平津館叢書』本）では巻下「怨曠思惟歌」の條に見える。『漢書』、『後漢書』に見えない主な記載としては、まず、単于の死後、胡の風習によって息子に嫁ぐことになった際にそれを拒否し、服毒自殺を遂げたということがある⁴。そして、その死後、「單于舉葬之。胡中多白草，而此冢獨青」と匈奴の地に葬られたことが記されるが、これが後世頻繁に詩に詠われる「青塚」という言葉の拠り所となっていることは言うまでもない⁵。『琴操』では『後漢書』と同じく自ら求めて匈奴の地に行ったことになっているが、王昭君の出身については「齊國王襄女也」とあり、『漢書』、『後漢書』

が「良家子」としか言わないところをより詳しく述べ、また、後宮にいた時間も「五六年」と具体的に記す。元帝が王昭君の美しさに気づいた時には取り返しがつかず、ため息をついて「朕已誤矣」と言ったことや、王昭君の恨みの言葉や作った歌を記すなど⁶、史書に比べ、細部が詳しく描かれている。四言二十四句にも及ぶ王昭君の詩が載せられ、民間の伝説と言うよりは、知識人の手が相当に入っていると考えた方が妥当かと思われる。『琴操』は後漢の蔡邕の著書とされているが、『後漢書』記載の故事よりも後の時代の故事が記載されているとも言われる⁷。

次に『西京雜記』であるが、この書物で新たに現れるのは「画工」の存在である。元帝の後宮には女性の数が多かったため、画工に絵を描かせ、その絵によって女性を選んでいた。宮人たちは画工に賄賂を贈ったが、王昭君だけは賄賂を贈らなかったため元帝に召し出されることはなかった。匈奴が妻となる美人を求めると元帝は絵を見て王昭君を選び、匈奴の地に行かせることにした。召し出してみると「後宮第一」の美しさであったため、元帝は悔やんだが、外国に対する信義を重んじてそのまま人を替えることはせず、画工たちは処刑された。匈奴に嫁いで以後のことは記されておらず、王昭君がどのような最期を遂げたのかはについても触れていない⁸。

『後漢書』と『琴操』に見える、怨みの思いを持ちつつ、元帝に当てつけるかの如く自ら申し出て匈奴の地に向かう比較的能動的な王昭君に比べてみれば、『西京雜記』においては、賄賂を取る画工という存在を介在させることにより、後宮における王昭君の不遇と、自らの意志ではなく匈奴へ嫁ぐこととなる数奇な運命をより蓋然性のあるものへと変え、「貌後宮第一、善應對、舉止閑雅」である物言わぬ王昭君の悲哀を際立たせる形になっている。王昭君説話は画工の存在によって、王昭君の悲劇性と、匈奴に対する信義を重んじざるをえない（「重信於外國」）元帝の責任回避を見事に両立させることになった。王昭君説話はこの画工の存在無しには成立しなかったであろう。

『西京雜記』は葛洪の撰とされるが、そこに見える王昭君の故事は、西暦五、六百年頃のこの故事の変化を代表するものであるとする考えもあり⁹、また、成書年代についても葛洪以後の六朝期と推論されている¹⁰。ただ、宋の劉義慶によって編まれた『世説新語』「賢媛篇」には画工に賄賂を贈らなかったために醜く描かれ、匈奴に行くことになった王昭君の話が載せられており、劉宋の頃には『西京雜記』に見える故事は通行していたのであろうと考えられる。

『琴操』、『西京雜記』ともに、六朝期の王昭君説話の変遷を反映した書物と考えられる。悲劇の主人公として匈奴の地で亡くなったことや画工の介在など、その基本的な構造は、六朝期にできあがったといってよ

いであろう。

二、王昭君と琵琶——唐代以前

では、琵琶はいつ頃王昭君の故事に現れてくるのであろうか。

まず挙げられるのが、晋の石崇「王明君詞序」（『文選』卷二七）である。

王明君者、本是王昭君、以觸文帝諱改焉。匈奴盛請婚於漢、元帝以後宮良家子昭君配焉。昔公主嫁烏孫、令琵琶馬上作樂、以慰道路之思。其送明君亦必爾也。其造新曲、多哀怨之聲、故叙之於紙云爾。

武帝の元封年間、烏孫に江都王建の娘細君を嫁がせるときにその旅の悲しみを慰めるために琵琶が演奏されたことになって、王昭君の時にもそのようにした、ということである¹¹。この他に同じく晋の傅玄の「琵琶賦序」でも「漢送烏孫公主、念其行道思慕、使知音者于馬上作之¹²」とあり、烏孫公主の出立に際し、馬上で演奏されたという認識があったようである。烏孫公主の故事はあくまでも彼女以外の人間が琵琶を弾いたということであり、王昭君の場合もそのように考えられていたのであろう。

唐代以前の詩についてみると、王昭君の故事はしばしば詠われるが、楽府が中心である。郭茂倩の『樂府詩集』卷二九、相和歌辭に「吟歡曲」四曲のひとつとして「王明君」があり、石崇の作品が「晋樂所奏」として最初に挙げられている。故事については郭茂倩は『西京雜記』を引く。郭茂倩の引用する陳の釈智匠撰の『古今樂録』には「王明君一曲、今有歌。大雅吟、楚妃歌二曲、今無能歌者」とあり、「王明君」は陳の頃まで歌われていたらしいことがわかる。石崇の作品以外には、宋の鮑照、梁の施榮泰、北周の庾信の作が挙げられている。また、これに続けて「明君詞」と「昭君歎」と題される作品がいくつか見える¹³。

また、『樂府詩集』卷五九、琴曲歌辭に「昭君怨」、が録されており、楽府題に関する注としては『琴操』と『漢書』が引かれている。作品としては『琴操』に見える王昭君の詩が始めに挙げられ、その他には梁の王叔英妻劉氏、陳後主の作品がある。

楽府題として晋から陳、隋まで詠い継がれているが、その内容は遠方に嫁ぐ悲しみを詠うものである。例えば、石崇の「王明君詞」では次のように詠われる¹⁴。

我本漢家子、將適單于庭。辭訣未及終、前驅已抗旌。
僕御涕流離、轅馬悲且鳴。哀鬱傷五内、泣淚濕朱纓。
行行日已遠、遂造匈奴城。延我於穹廬、加我閼氏名。
殊類非所安、雖貴非所榮。父子見陵辱、對之慙且驚。
殺身良不易、默默以苟生。苟生亦何聊、積思常憤盈。
願假飛鴻翼、乘之以遐征。飛鴻不我顧、佇立以屏營。
昔爲匣中玉、今爲糞上英。朝華不足歡、甘與秋草并。
傳語後世人、遠嫁難爲情。

王昭君の一人称で詠われるこの詩は、出発に際しては、

従者や御者も涙を流し、ながえに繋がれた馬も悲しんで鳴き(僕御涕流離、轅馬悲且鳴)、王昭君自身も悲しみのためにはらわたが破れんばかり、その流す涙は匂い袋の朱色の紐をぬらすほど(哀鬱傷五内、泣淚濕朱纓)、というように、匈奴の地への旅立ちが最初から悲しみに満ちたものであったことが描写される。彼の地での生活も「殊類非所安、雖貴非所榮」と、心安らかなものではなく、単于の妻という地位も榮譽とも思われぬ。また、『後漢書』にあったように父子二代の妻となったことについては、「父子見陵辱、對之慙且驚」とその習俗に従わざるを得なかったことを恥じ、また驚いている。自ら命を絶つこともできず、ただ生きながらえているだけにすぎず(殺身良不易、默默以苟生)、悲しみだけが募っていく(積思常憤盈)のである。最後に「遠嫁難爲情」と遠方の地に嫁ぐことはとてもやりきれず耐えられないことであると詠う。匈奴を「殊類」、その地を「糞」(汚れた土)という表現には作者石崇の時代の匈奴に対する感情が反映していると思われるが、全体を通して王昭君が匈奴へ嫁いだことを悲劇としてとらえる姿勢が強く感じられる。

この詩は、全編が一人称で語られていることもあってか、王昭君の最期については触れられていない。また、画工の存在も詠われぬ。序文で琵琶に言及されているが、詩の中には音楽については一切詠われていない。

他の詩ではどうであろうか。楽器に関して言えば、漢代に西域の楽器として流行した胡笳がいくつかの詩に見えるが、琵琶という語は見あたらない。王褒「明君詞」の「唯餘馬上曲、猶作出關聲」、庾信「王昭君」の「別曲真多恨、哀絃須更張」、陳後主「昭君怨」の「只餘馬上曲、猶作別時聲」という表現がその存在を暗示させる程度である¹⁵。樂府以外の詩では、梁の徐勳「詠琵琶詩」(『初学記』卷十六)に「雖爲遠道怨、翻成今日歡。含花已灼灼、類月復團團」とあり、王昭君あるいは烏孫公主を意識した表現が見えるが、総じて言えば、唐代以前は、石崇の「明君詞」序に見える、王昭君の出立の際に馬上で琵琶が演奏されたであろうということ以上に、王昭君と琵琶を結びつけて詠うことはなかったといえよう。

ここで琵琶という楽器について付け加えておけば、徐勳の詩に「類月復團團」とあるように、晋から梁あたりにかけて琵琶と称されていたのは、円形の胴体で、まっすぐな棹をもつ四絃の楽器であり、唐代に一般的となる梨型の胴体に頸の曲がった棹をもつ、いわゆる曲項四絃琵琶とは違っていた¹⁶。

さらに、音楽史の側面から琵琶という楽器について簡単に述べておこう¹⁷。琵琶について文献の上で記録が現れるのは後漢の時代で、劉熙の『釈名』「釈楽器」と応劭の『風俗通』である。『初学記』卷十六に引くところでは、『釈名』には「琵琶、本胡中馬上所鼓也、

『風俗通』には「琵琶、近代樂家所作、不知所起」とある。これだけでは前漢の頃、琵琶があったのかどうかかわからない。はっきりと前漢の時代に琵琶があったことを言うのは、先に挙げた晋の傅玄の「琵琶賦序」と石崇の「明君詞序」だけなのである。『初学記』に引く傅玄「琵琶賦序」には「故老云、漢送烏孫公主、念其行道思慕、使知音者于馬上作」というから、このことも当時広く知られていたというわけではなかったようだ。これだけの資料で前漢の時代、それも烏孫公主、つまり武帝の時代に琵琶があったと断定することには躊躇せざるを得ない。王昭君の時代についても同様のことが言える。つまり、王昭君の時代にはまだ琵琶という楽器はなかったのかも知れないのである。

ただ、梁の沈約の手になる『宋書』卷十九「樂志」は傅玄の「琵琶賦」を引いて烏孫公主が嫁ぐ際に演奏されたとし¹⁸、唐初の虞世南「琵琶賦」には「尋斯樂之惟始、乃弦戢之遺事。強秦創其濫觴、盛漢盡其深致」とある¹⁹。また、唐代中期の杜佑『通典』卷一四四にも傅玄「琵琶賦」を引いて烏孫公主のことを述べ、晩唐の段安節『樂府雜録』には「始自烏孫公主造、馬上彈之」というように、六朝から唐代においては、烏孫公主の頃には琵琶はあったと一般的には理解されていたようだ。

三、王昭君と琵琶——宋詩

唐代はあとで述べることとし、先に宋代の例についてみておきたい。

宋代で王昭君を詠った詩としてよく知られているのは王安石「明妃曲」二首とそれに唱和して作られたいくつかの詩である。王安石の作は後世、その詩句が批判にさらされたが、ここではその議論についてはおいておく²⁰。

王昭君と琵琶という点について言えば、王安石の「明妃曲」二首(『全宋詩』卷五四一)のうち、第一首は琵琶については詠わない。第二首は次のように詠う。

明妃初嫁與胡兒、氈車百兩皆胡姬。含情欲說獨無處、傳與琵琶心自知。黃金捍撥春風手、彈看飛鴻勸胡酒。漢宮侍女暗垂淚、沙上行人卻回首。漢恩自淺胡自深、人生樂在相知心。可憐青冢已蕪沒、尚有哀絃留在今。

第三、四句に「思いを誰かに告げようと思ってもその相手もなく、心の内を琵琶に託す」という。匈奴の地にあって孤独な王昭君の唯一の表現手段として琵琶が存在している。続く二句は王昭君が琵琶を演奏することをいうが、「飛鴻」に乗って漢の地に戻ることはかなわず、ただその姿を眺めるだけである²¹。琵琶の調子に侍女は涙し、砂漠に行く人はその音色を耳にしては振り返る。最後の二句では、王昭君の死後もその悲しみに満ちた曲だけが今に伝わる、という。王昭君の弾く琵琶の悲しげな音が通奏低音の如く響いている詩である。ここでは、琵琶を弾き、そこに思いを託す王昭君

の姿が描かれ、琵琶を弾く王昭君というイメージができあがっている。

これに唱和した作品の中で、欧陽修の「明妃曲和介甫」二首（『全宋詩』卷二八九）の第一首はさらに王昭君の弾く琵琶に焦点を当てて作られている。

身行不遇中國人，馬上自作思歸曲。推手爲琵琶，胡人共聽亦咨嗟。玉顏流落死天涯，琵琶卻傳來漢家。漢宮爭按新聲譜，遺恨已深聲更苦。織織女手生洞房，學得琵琶不下堂。不識黃雲出塞路，豈知此聲能斷腸。

上に引用したのは第七句目以降である。まず、王昭君が自ら「思歸曲」を作ったと詠われる。そして、琵琶の演奏は胡人をも感嘆させるほどであり、その調べは死後、逆に漢宮へと伝わり、宮女たちは争ってその深い恨みのこもった音楽を演奏した。しかし、その宮女たちは宮殿から出ることもなく、出塞の旅路の辛さを知らず、また王昭君の音楽に込められた悲しみなどわかりはしないというのが大体の意味するところである。ここでは、王昭君は琵琶によって自己の悲しみを表現する演奏者というだけでなく、作曲者でもある。死後、王昭君の作った曲が漢の宮中に伝わり、宮女によって琵琶が演奏されたという話を通して、王昭君と宮女のおかれている環境の違いと王昭君の悲劇性を際立たせる。琵琶が詩的世界の構造を支えているといってもよいであろう。

これ以外の唱和詩には梅堯臣「和介甫明妃曲」、劉敞「同永叔和介甫昭君曲」、曾鞏「明妃曲二首」、司馬光「和王介甫明妃曲」がある²²。これらの詩全てが琵琶に関する表現を含む。梅堯臣は「馬上山川難記憶，明明夜月如相識，月下琵琶旋製聲，手彈心苦誰知得」と、孤独に苦しむ胸の内を琵琶の音に託し、劉敞は詩の最後に「青冢消摧人迹絶，惟有琵琶聲正哀」と、王昭君の死後も琵琶の哀しげな音色が響くと締めくくっている。曾鞏と司馬光の作には「琵琶」の語は見えないが、曾鞏は「幾成新曲無人聽，彈向東風空淚垂」，「直欲論情通漢地，獨能將恨寄胡琴」と、漢土への思いと孤独感、恨みを「胡琴」に寄せる²³。司馬光は「舊來相識更無物，只有雲邊秋鴈飛，愁坐冷調四絃，曲終掩面向胡天，侍兒不解漢家語，指下哀聲猶可傳，傳徧胡人到中土，萬一侘年流樂府」と詠うが、「四絃」は琵琶を指すであろう。胡地における孤独感の中で琵琶を弾く王昭君の姿が描かれ、先に挙げた欧陽修の作と同じく、王昭君の琵琶の哀しげな響きが漢土に伝わることの可能性を詠う。唱和詩であるから、もとの王安石の詩を意識した結果とも言えるが、王昭君と琵琶との結びつきの深さが共通認識としてあったと考えられよう。

琵琶を弾く王昭君というイメージは共通しているが、それは上の唱和詩以外でも見られる²⁴。

『漢書』や『後漢書』、『琴操』、『西京雜記』などの書物に見られなかったこのイメージについては、宋代にすでに議論と対象となっている。

王楙は傅玄の「琵琶賦序²⁵」と石崇の「明君詞序」を引き、「これらから琵琶を弾いたのは随行者であり、行くもの自らが弾いたのではないということがわかるが、今の人は明妃出塞図を描くとき、馬上で愁いを含んだ表情で琵琶を弾く姿に描き、詞を作るものも王昭君自らが琵琶を弾いたという意味に作る」と指摘している²⁶。ここの「今人」は宋代をさすと思われるが、王昭君の出塞図は既に唐の閻立本にあることが知られている²⁷。おそらくそれ以後も多く描かれていたであろう。

また、程大昌は、烏孫公主の出塞の時に琵琶が演奏されたが、王昭君の場合も同様であったとすることに異議をとる姚寬の意見を支持している²⁸。

しかし、このような意見があるということは逆に王昭君が琵琶を弾くというイメージが宋代にある程度広まっていたことを物語っているであろう。

詩以外にも王昭君と琵琶を結びつける記載がある。宋代の地理書である王象之『輿地紀勝』（『續修四庫全書』所収）卷七四「荆湖北路歸州」の「明妃廟」の條に宋の樂史の『太平寰宇記』を引き、「昔明妃入胡，於馬上彈琵琶怨且歌」という。出塞に際して馬上で琵琶を弾いたという、王楙が指摘した表現が現れている。同じく「琵琶橋」の條には「在秭歸縣，昭君選入漢宮時，曾鼓琵琶，少憩于此」とある²⁹。後世に作られた話であることは間違いないが、これも王昭君が琵琶を弾いたというイメージの存在を示すものである。

これらの例を見ても、宋代には琵琶を弾く王昭君のイメージはある程度定着していたと考えてよいのではないだろうか。

四、王昭君と琵琶——唐詩

胡地への出発の際に烏孫公主の時と同じように琵琶が演奏されたであろうという石崇の言葉からそれほどかけ離れた表現は六朝時代にはなかったものが、宋代には明らかに琵琶を弾く王昭君というイメージができあがっている。次に、唐代の詩について見ていきたいと思う。

王楙や程大昌が言うように（注26、28参照）、もともと、石崇は烏孫公主の事例から王昭君の場合を推測しただけであり、出立時に王昭君が馬上で琵琶を弾いた、或いは王昭君は琵琶を弾くことに優れていたと言っているわけではない。王楙や程大昌の意見から考えて、宋代においても王昭君が琵琶を弾いたという史実は信頼できる記録としては残されていなかったであろう。

唐代はどうであったのだろうか。まず、王昭君に関しては音楽との関わりで史書などにいくつかの記事が見える。まず、『旧唐書』卷二九「音楽志」には南朝から伝わる旧樂である清樂のひとつとして「明君」という曲が挙げられており、漢の元帝時、漢人が遠くに嫁

ぐ王昭君を憐れんで作ったという話と、晋の石崇がこの曲を妓女の緑珠に教えたという逸話を記す。そして、唐代においては西域から入ってきた音楽におされ、南朝以来の古い音楽である清楽は次第に軽んじられるようになっていったのであるが、その中では「明君」だけが武則天の頃まで「四十言」伝わっており、玄宗の開元年間の歌工であった李郎子はそれを唱うことができ、彼の死後、清楽の歌は絶えてしまったという記事が『通典』や『旧唐書』に見える³⁰。王昭君のことを詠った「明君」だけが唐代でもある時期までは歌い継がれていたという、この事実は王昭君の故事に対する一部の唐人の愛着をある程度物語っている。同時に、唐代全般にわたって王昭君を主題とした詩が作られたり、後で触れるように王昭君の語り物もあったと思われるのに、王昭君を詠った旧来の歌が唱われなくなったということは、旧来の音楽に対する一般の興味が相当薄れてしまうととも、王昭君を主題とする表現に対する興味の在り方が変化したことを示している。

琵琶についての記事では、『旧唐書』卷二九「音楽志」に漢の武帝時、烏孫公主を嫁がせたときのことを記す。また、『通典』にも同様の記事がある³¹。注31に挙げたように、唐代のいくつかの文献でも、傅玄、石崇の説を踏襲して、烏孫公主が嫁いだ際に馬上で琵琶が演奏されたことが記されており、先にも述べたように、このことは琵琶という楽器の古い時代の記録として唐代には理解されていたようだ。これらには石崇の「明君詞序」のように王昭君の時には云々という記載はない。

唐代においても『漢書』以来の王昭君出塞の故事と石崇「明君詞」、傅玄「琵琶賦」というのが王昭君と琵琶についての記述の基本的な枠組みである。当然、これらには王昭君が琵琶を弾いたという記述はない。

ここで唐詩における王昭君と琵琶について見ておこう。唐代においても王昭君を詠う楽府題の作品はある。「王昭君」、「明君詞」、「昭君怨」、「明妃怨」がそれである。『楽府詩集』には併せて三十四首が収められている。

この中で詩中に「琵琶」の語が見えるのは、董思恭、劉長卿、李商隱の三人の作だけである³²。

琵琶馬上彈，行路曲中難。漢月正南遠，燕山直北寒。
髻鬟風拂亂，眉黛雪霑殘。斟酌紅顏改，徒勞握鏡看。
(董思恭「昭君怨」『全唐詩』卷六三)

自矜嬌豔色，不顧丹青人。
那知粉繪能相負，卻使容華翻誤身。上馬辭君嫁驕虜，
玉顏對人啼不語。北風雁急浮雲秋，萬里獨見黃河流。
纖腰不復漢宮寵，雙蛾長向胡天愁。琵琶弦中苦調多，
蕭蕭羌笛聲相和。誰憐一曲傳樂府，能使千秋傷綺羅。
(劉長卿「王昭君歌」『全唐詩』卷一五一)

毛延壽畫欲通神，忍爲黃金不顧人。

馬上琵琶行萬里，漢宮長有隔生春。

(李商隱「王昭君」『全唐詩』卷五四〇)

董思恭は初唐、高宗時の人、劉長卿は盛唐、玄宗の開元年間の進士、李商隱は晩唐の詩人である。董思恭と李商隱の作は漢土から匈奴の地へと向かうときに馬上に琵琶を弾くことをいう。基本的には石崇の「明君詞序」を踏まえている。琵琶を弾く王昭君というイメージを受け取ることは可能であろう。一方、劉長卿の詩は、「漢宮」に二度と戻ることはなく、永遠に「胡天」で愁いを抱いて生きることになった王昭君の思いが「琵琶弦中苦調多」という表現となっており、胡地で王昭君が弾く琵琶と解釈することは可能であろう。ただ、宋代の王安石や歐陽修ほど明確には言っていない。「誰憐一曲傳樂府，能使千秋傷綺羅」という句は、先に挙げた歐陽修と司馬光の表現につながるものである。

この三首の中で、劉長卿と李商隱の作は画工によって醜く描かれたということ詠っているが、唐代の王昭君を詠う詩にはこのことに触れるものが多い。李商隱の作では毛延壽という画工の名が見えるが、管見の及ぶ限りでは最初であり、他には見えない。『西京雜記』では画工の名は五人拳がっており、毛延壽が人の姿を描くことに優れていることは記されてはいるものの、王昭君の姿を醜く描いたのは彼であるとは書かれていない。これも王昭君説話の変遷の過程で生まれてきたものであろうが、元曲『漢宮秋』では毛延壽は主要登場人物のひとりとなっている。

「琵琶」ではなく「胡琴」が出てくる例があり、李咸用「昭君」(『全唐詩』卷六四五)は「千秋青塚骨，留怨在胡琴」と詠う。胡琴は琵琶のことを指しており、王昭君が琵琶を弾いていたことを想像させる。或いは次の杜甫の詩のように、王昭君の怨みを詠った曲が死後も胡琴にあわせて唱われ続けたということであるかもしれない。

『楽府詩集』所収の詩以外では、杜甫の「詠懷古跡」五首の第三首が王昭君と琵琶のことを詠う。

群山萬壑赴荆門，生長明妃尚有村。一去紫臺連朔漠，
獨留青冢向黃昏。畫圖省識春風面，環珮空歸月夜魂。
千載琵琶作胡語，分明怨恨曲中論。

(『全唐詩』卷二三〇)

最後の二句は、例えば、「千年後の今日も琵琶語りは蛮族のこぼをまじえながら、彼女に代って怨みのこころをはっきりと曲中にのべたてている」と訳されたり、「自昭君没世以来、歴代一直彈奏着由昭君故事譜成的帶有北国風味的琵琶曲(昭君の没後、昭君の故事から作られた北方の味わいを持った琵琶の曲が演奏され続けている)」と注されたりしており、王昭君が弾いた琵琶ということではないと理解されている³³。

ところが、この詩は古くは必ずしもそのように解釈されていたわけではなかった。南宋淳熙八(1181)年

の序のある、郭知達編注の『九家集注杜詩』では趙次公の注を引き、「舊注昭君適匈奴，在路愁怨，遂於馬上彈琵琶，以寄其恨。至今傳之，名昭君怨，不知何所據。此蓋幸於世俗所傳昭君自能彈琵琶者」という。これに拠れば、古い注釈では王昭君が馬上で琵琶を弾き、その怨みを詠った「昭君怨」という曲が今に至るまで伝わる、という解釈がなされていたということになる。さらに、それは「世俗」に伝わる、王昭君は琵琶を弾くことができたという伝説に引きずられたものである、という。宋代、世俗にそのような話が流布していたことがわかるが、唐代、杜甫の時代はどうであったのかだろうか³⁴。

王昭君と琵琶の結びつきという点について、琵琶を詠った詩から見てみよう。

四弦不似琵琶聲，亂寫眞珠細撼鈴。指底商風悲颯颯，
舌頭胡語苦醒醒。如言都尉思京國，似訴明妃厭虜庭。
遷客共君想勸諫，春陽易斷不須聽。

（白居易「春聽琵琶兼簡長孫司戶」【全唐詩】卷四四〇）

眞珠をばらまいたか或いは鈴を揺らしたかのような琵琶の音色、また胡地の言葉の歌を伴っていたのであろうか、その言葉が、「訴うるに似たり明妃の虜庭を厭うを」と王昭君の言葉へと連想が繋がる。また、張祐の「觀宋州于使君家樂琵琶」では次のように詠う。

歴歴四弦分，重來上界聞。玉盤飛夜雹，金磬入秋雲。
隴霧笳凝水，砂風雁咽群。不堪天塞恨，青塚是昭君。

（【全唐詩】卷五一〇）

玉の大皿に落ちる雹、金の磬と、琵琶の音色を乾いた冷たさの感じられるものに喩え、そこから辺塞の青塚に眠る王昭君の恨みへと向かう。さらに許渾の「聽琵琶」では次のように詠う。

欲寫明妃萬里情，紫槽紅撥夜丁丁。胡沙望盡漢宮遠，
月落天山聞一聲。（【全唐詩】卷五三八）

琵琶を聴いて、万里も離れた土地に嫁いだ王昭君の思いを表現しようとする、というのは杜甫の「詠懷古跡」と同じように、演奏された曲が王昭君に関わる題であったか、王昭君の語り物であった可能性を示唆する³⁵。先の二首とあわせて、「厭」、「恨」「萬里情」と、王昭君の匈奴の地に対する嫌悪感や望郷の念が琵琶の音色と深く結びついて表現されている。いずれも、王昭君を主題とする音楽か語り物であった可能性もあろう。

このように、琵琶を詠った詩で王昭君に話が及ぶものはいくつか見られるが、王昭君が琵琶を弾くという姿を明確にイメージして詠う例は見あたらない。

唐詩全てをその対象とすることはできないが、琵琶と王昭君の結びつきの強さは感じられるものの、王昭君が琵琶を弾くということをはっきりと詠う例はなかなか見いだせない。世俗の言い伝えとして、王昭君が琵琶を弾くという話があったとすれば、中唐以降、演

奏者としての王昭君を詠う例がもっとあってもよいのではないかと考えるが、唐詩においては、宋代の詩のように、演奏者としての王昭君を明らかに前提とした表現はあまり見られない。

詩以外では、王昭君の故事を扱ったものに敦煌文書の『王昭君變文』があるが、現存のものは前半の一部がかけており、琵琶或いは胡琴という語も見えない。音楽に関わる部分として「管絃馬上橫彈，節會途間常奏」とある³⁶。これは王昭君が匈奴へ出発する場面であるが、石崇以来の理解で言えば、琵琶が演奏されたと考えられよう。この變文が一般の庶民を対象にしたものであり、俗伝に王昭君が琵琶を弾くという話が広まっていたのならば、そのような表現が含まれていても不思議はない。しかし、特に王昭君が琵琶を演奏するという描写は見えない。欠けている部分には後宮での生活の場面があったであろうから、元曲『漢宮秋』の如く、琵琶を弾くという描写があったかも知れないが、今は不明である。もしあったとすれば、『漢宮秋』に見える元帝の嘆きのように、それを踏まえた表現が後にあっても良さそうなものであるが、そのような表現は見えない。ここではこれ以上の議論は避けておく。

五、唐代文人と琵琶

最後に、宋詩において王昭君が琵琶を弾くというイメージが成立していることに何らかの関わりがあったのではないと思われる事柄について推論を述べておきたい。

先に、唐代における琵琶という楽器の状況について述べておくと、別に論じたこともあるので簡潔に触れておく³⁷。

唐代の宮中では隋の九部楽の制度を受け継いで、十部楽を制定したが、そのうち西涼楽、龜茲楽、天竺楽、疎勒楽、安国楽、高麗楽、高昌楽の七つで琵琶が使用された。西域の音楽が中心であるが、そのなかで、琵琶は中心的な楽器の位置を占めていたといえる。また、段安節『樂府雜錄』には、玄宗開元年間の賀懷智から、徳宗、武宗、文宗、懿宗の時代に至るまで、十四名の琵琶奏者の個人名が挙げられている。これは他の楽器と比べて圧倒的に多い。盛唐から晩唐にかけての琵琶の流行が推察されよう。

詩人たちは身近に演奏を聴くことが多かったことは予想に難くない。劉希夷や王維のように自ら演奏するものもあったといわれる³⁸。また、白居易のように琵琶を弾く家妓をかかえていた者は多くいたことであろう。

先に述べたように、唐詩においては宋詩の如く、琵琶の演奏者、表現者としての王昭君を明確に意識した表現は多くは見出しがたいが、琵琶という楽器に視点を移すと、上に述べたような環境のもとで、よく詠われている。その中で最もよく知られるのは白居易の「琵

琵琶」であろう。他に白居易の友人であった劉禹錫、元稹にも琵琶奏者を詠う作がある。これらの作品を通して唐詩の琵琶をめぐる詩の一つの姿を見ておきたいと思う。

まず、劉禹錫の「秦娘歌」である。瞿蛻園『劉禹錫集箋證』卷二十七によれば、元和元(807)年から元和十年の間、左遷されて朗州司馬の任にあったときの作である。序に拠れば、呉郡出身の秦娘は韋尚書(韋夏卿)の家妓で、もともと歌を本業としていたが、楽工に琵琶を習い、程なくその術を会得した。韋夏卿に従って都に上ってから当時はやりの新曲をもうまくこなし、「秦娘名字往見稱於貴遊之間」といわれるほどになった。元和の初めに韋夏卿が亡くなってから、しばらく民間に出ていたが、蕪州刺史張恣のものとなった。張恣が罪を問われて武陵郡に謫居させられ、そのまま亡くなってからは「秦娘無所歸，地荒且遠，無有能知其容與藝者。故日抱樂器而哭，其音燹殺以悲³⁹」という有り様であった。寄る辺ない身となり、その美貌と芸を知るものがない状態におかれてしまったというのである。詩では、時間の経過に従って仕えた主人に二度も死なれてしまった事を詠う。最後の八句は次のように詠われる。

山城少人江水碧，斷雁哀猿風雨夕。朱弦已絕爲知音，雲鬢未秋私自惜。舉目風煙非舊時，夢尋歸路多參差。如何將此千行淚，更灑湘江斑竹枝。

寄る辺ない身の置かれたあたりのわびしい様子を詠い、琵琶を弾かなくなったことをいう。あたりの景色も以前とは違って見え、行く当てもなく、止まることがない涙をどうしようと、秦娘の悲しみにくれる姿を詠っている。

この詩は枠組みから見れば、琵琶の名手とその仕えた主人と離別し、嘗ての輝かしい日々を送った場所から遠く離れたところで落ちふれ、嘆き悲しんでいるのを、同情を持って左遷された詩人が詠う、ということになっている。この枠組みはそのまま白居易の「琵琶行」に当てはまる⁴⁰。

白居易の「琵琶行」(『白居易集箋校』卷十二)は江州司馬に左遷された後、元和十一(817)年の作とされる⁴¹。この詩では琵琶を弾く女性は「長安倡女」であり、十三才で琵琶の演奏を会得し、宮中の教坊坐部に属し、琵琶の腕は師匠を感服させるほどで、美人でもあった(「十三學得琵琶成，名屬教坊第一部，曲罷曾教善才伏，粧成每被秋娘妬」という。琵琶の才能と美貌とを兼ね備えた女性が主人公である。しかし、年をとり、落ちふれて商人の妻となり、「今漂淪憔悴，轉徙於江湖間」ということで、江州で白居易と出会うことになったという状況である。白居易は「同是天涯淪落人」と、女性の境遇に自らのそれを重ね合わせる。劉禹錫の作に比べ、琵琶の演奏を言語的に表現することに意を注いでいる点、白居易自身のことを詠う部分も見られるな

ど、違いはあるが、大まかな枠組みはほぼ同じといって差し支えないであろう。さらに、白居易には琵琶奏者を詠った詩に江州司馬在任中の作とされる「江南遇天寶樂叟」(『白居易集箋校』卷十二)もある。「能彈琵琶和法曲，多在華清隨至尊」と、天寶年間玄宗のそばにいた老琵琶奏者の言葉として詠われている。詩は「天下太平」時の様子と安祿山の乱後の荒廃した長安の様子、「從此漂淪到南土，萬人死盡一身存」とおちぶれた自らのことを詠う。

これらの詩に詠われる淪落した琵琶奏者に共通しているのは、当然ながら過去の生活との落差、その活動の地であった長安から遠く隔たった地にあること、また、「秦娘歌」のように美貌も琵琶のすばらしさも理解されない環境にあることなどである。

このモチーフが漢土を遠く離れた胡地で王昭君が琵琶を弾くというイメージに投影されているのではないだろうか。王昭君は琵琶を弾くことで唐詩に見える琵琶奏者の悲劇をも引き受けることになったのではないか。琵琶を弾く王昭君というイメージが白居易の詩の影響下に成立したとまでは言えないが、王昭君が琵琶を弾くというイメージは「琵琶行」で描かれる淪落した琵琶奏者によってより強められ、定着していったのではないだろうか。宋代には王安石の詩のように王昭君を詠いながら、「琵琶行」の「同是天涯淪落人」、「十三學得琵琶成」などの詩句をそのまま使う例もあり、明らかに「琵琶行」の女性と王昭君のイメージが重なっていると考えられるものがあることはそれを物語っているのではないだろうか⁴²。

注

- 1 『破夢夢孤雁漢宮秋雜劇』のテキストは王学奇主編『元曲選校注』(河北教育出版社，1994)に拠る。また、この戯曲については次の論文を参照した。
吉川幸次郎「漢宮秋雜劇の文学性」(『日本中国学会報』第17集，1965)
- 2 王昭君についての故事は例えば、以下の諸論考などにまとめられている。
張寿林「王昭君故事演變之点点滴滴」(『敦煌學文論文錄』所収，上海古籍出版社，1982)
尾上兼英「虚構の中の「王昭君」」(『日本中国学会報』第45集，1993)
内山精也「王安石「明妃曲」考」(上・下)(『橄欖』5・6号，宋代詩文研究会，1993)
張高評「王昭君形象之流變與唐宋詩之異同」(『世變與創化』所収，中央研究院中國文哲研究所，2002)
堀江恭子『王昭君』(白帝社，2003)
- 3 昭君字嬪，南郡人也。初，元帝時，以良家子選入掖庭。時呼韓邪來朝，帝勅以宮女五人賜之。昭君入宮數歲，不得見御，積悲怨，乃請掖庭令求行。呼韓邪臨辭大會，帝召五女以示之。昭君豐容靚飾，光明漢宮，顧景裴回，竦動左右。帝見大驚，意欲留之，而難於失信，遂與匈奴。生二子，及呼韓邪死，其前閼氏子代立，欲妻之，昭君上書求歸，成帝勅令從胡俗，遂復爲後單于閼氏焉。(卷八九，南匈奴傳)

- 4 單于死，子世遠繼立。凡爲胡者，父死妻母，昭君問世遠曰，汝爲漢也，爲胡也。世遠曰，欲爲胡耳。昭君乃吞藥自殺。
- 5 「單于舉葬之。胡中多白草，而此冢獨青」という表現は、『世説新語』賢媛篇の劉孝標注に引く『琴操』、唐の呉兢『樂府古題要解』「王昭君」（『学津討原』本）に引く『琴操』、郭茂倩『樂府詩集』卷五九「琴曲歌辭」に引く『樂府解題』中の『琴操』には見えない。
- 6 於是昭君喟然越席而前曰，妾幸得備在後宮，粗醜卑陋，不合陛下之心，誠願得行。……昭君恨帝始不見遇，心思不樂，心念鄉土，乃作怨曠思惟歌，……
- 7 『琴操』に記載された王昭君の故事について，張高評氏は，礼教的色彩が強く，西曆三，四百年頃の文人の手になるものであり，『西京雜記』とは異なる系統の故事であろうと推論されている。注2前掲論文参照。
- 8 『西京雜記』は『四部叢刊』本による。
- 9 張寿林「王昭君故事演變之点点滴滴」参照。
- 10 小南一郎「『西京雜記』の伝承者たち」（『日本中国学会報』第24集，1972）に「葛玄から葛洪に伝わる葛氏道と呼ばれる道教の一派は，葛洪以後どうなったのかよく分からないが，葛洪グループの諸作品と共に，『西京雜記』も葛氏道の後裔たちと関係を持ちつつ六朝期に江南で編纂されたと考えられるのが，現在のところ最も可能性のある結論ではなかろうか」とある。
また，張高評「王昭君形象之流變与唐宋詩之異同」では，『西京雜記』の作者が葛洪か呉均か，確たる証拠はなく，おそらく六朝末期に故事を集めて作られたもので，その成書時期は梁以後であろうとする。
- 11 『漢書』卷九六下「西域伝下」に「漢元封中，遣江都王建女細君爲公主，以妻焉」とあるが，琵琶の演奏に関しては記述がない。
- 12 引用は『初学記』卷十六に拠る。
『宋書』卷十九樂志には「漢遣烏孫公主嫁昆彌，念其行道思慕，故使工人裁箏筑，爲馬上之樂」とある。
- 13 「明君詞」は梁の簡文帝，武陵王紀，沈約，陳の張正見，北周の王褒，庾信，隋の何妥，薛道衡の計八首，「昭君歎」は梁の范靜婦沈氏の二首が収められている。テキストは中華書局排印本（1979）を参照。
- 14 引用は『文選』に拠る。
- 15 胡笳については次のような例が見える。
霜鞞旦夕驚，邊笳中夜咽（鮑照「王昭君」）
方調琴上曲，變入胡笳聲（庾信「明君詞」）
胡風帶秋月，嘶馬雜笳聲（薛道衡「明君詞」）
- 16 晋傅玄「琵琶賦」に「今觀其器，中虛外實，天地象也。盤圓柄直，陰陽絃也。柱十有二，配律呂也。四絃，法四時也。」（『通典』卷一四四に引く）とあり，六朝期の詩でも，次のような例があり，ともに琵琶の胴体の部分が円形であることを「月」に喩えていると思われる。これからも当時の琵琶の胴体が円形であったことが理解されよう。
王融「詠琵琶」：抱月如可明，懷風殊復清（『玉臺新詠集』卷四）
吳均「行路難」：洛陽名工見咨嗟，一剪一刻作琵琶。白璧規心學明月，珊瑚映面作風花。（『玉臺新詠集』卷九）
- 17 この部分については主として韓淑徳・張之年『中国琵琶史稿』（四川人民出版社，1985）を参照した。
- 18 注12参照。
- 19 「弦鼓」は「ふりつづみ」のことで『宋書』などでも琵琶の来源の一つとされる。
- 20 王安石の「明妃曲」の内容と制作の背景，詩句をめぐる議論については，注2内山論文に詳しい。
- なお，宋詩の引用は，基本的には『全宋詩』（北京大学古文獻研究所編，北京大学出版社出版）に拠る。
- 21 石崇の「明君詞」に「願假飛鴻翼，乘之以遐征。飛鴻不我顧，佇立以屏營」とあるのを踏まえている。
- 22 これらについては以下のテキストに拠る。
梅堯臣…朱東潤編年校注『梅堯臣集編年校注』（上海古籍出版社，1980）卷三十
劉歛…『公是集』（『四庫全書』本）卷十八
曾鞏…『元豐類藁』（『四部叢刊』本）卷四
司馬光…『溫國文正司馬公集』（『四部叢刊』本）卷三
- 23 「胡琴」という名称については林謙三氏「唐代の胡琴の名称」（『東アジア楽器考』（カワイ楽譜，1973））参照。それに拠れば，「当時（唐代）の胡琴は絃数などはともかくも，およそ琵琶の別称であつたらしい」という。
- 24 はっきりと王昭君が琵琶を弾くとは詠わないが，王昭君が琵琶を弾くことを前提とする詩句である。
秦觀「王昭君」：獨抱琵琶恨更深，漢宮不見空回顧（『全宋詩』卷一〇六八）
張耒「塞獵」：單于半醉擁貂裘，昭君獨抱琵琶泣（『張耒集』（中華書局，1998）卷十三）
呂本中「昭君」：左抱琵琶右揮手，胡地漢宮能幾春（『東萊詩集』（『四部叢刊』本）卷五）
- 25 傅玄「琵琶賦序」は，王琳の引用では「故老言漢送烏孫公主嫁昆彌，念其行道思慕，使知音者於馬上奏之」とある。石崇「明君詞序」は本稿第二章「王昭君と琵琶——唐代以前」文中の引用参照。
- 26 括弧内の原文は以下の通り。
則知彈琵琶者乃從行之人，非行者自彈也。今人畫明妃出塞圖，作馬上愁容自彈琵琶，而賦詞者，又述其自鼓琵琶之意矣。（『野客叢書』（『稗海』本）卷十「明妃琵琶事」）
- 27 『旧唐書』卷四五「輿服志」に「閩立本畫昭君入匈奴，而婦人有著帷帽者」とあり，「昭君入匈奴」という絵，或いは画題が有ったことが知られる。
- 28 程大昌「演繁露」（『儒学警語』本）卷三「明妃琵琶」に「琵琶所作爲烏孫公主出塞也。文人或通明妃用之。姚令威辨以爲誤是矣」とあり，姚寬の説に賛成しているが，厳密にはこれは王昭君の出塞の時に琵琶が演奏されたのではないということの指摘であって，王昭君が琵琶を弾くこと自体を直接否定しているわけではない。
- 29 『輿地紀勝』の記事については，清の胡鳳丹「青冢志」（『筆記小説大観』第五編）巻一に指摘がある。
- 30 『通典』巻一四六「清樂」の該当部分を引いておく。自長安以後，朝廷不重古曲，工伎轉缺，能合於管絃者，唯明君，楊叛，驍壘，春歌，秋歌，白雪，堂堂，春江花月夜等八曲。舊樂章多或數百言，武太后時明君尚能四十言，……。開元中，有歌工李郎子。郎子北人，聲調已失，云學於俞才生。才生，江都人也。自郎子亡後，清樂之歌闕焉。
『通典』の引用は中華書局版排印本（1988）による。
- 31 明君，漢元帝時，匈奴單于入朝，詔王嬋配之，即昭君也。及將去，入辭，光彩射人，聳動左右，天子悔焉。漢人憐其遠嫁，爲作此歌。晋石崇妓綠珠善舞，以此曲教之，而自製新歌曰，我本漢家子，將適單于庭，昔爲匣中玉，今爲糞土英。（『旧唐書』卷二九「音樂志」）
琵琶，四絃，漢樂也。……及漢武帝嫁宗女於烏孫，乃裁箏筑爲馬上樂，以慰其鄉國之思。（『旧唐書』卷二九「音樂志」）
琵琶，傅玄琵琶賦曰，漢遣烏孫公主嫁昆彌，念其行道思慕，故使工人裁箏筑，爲馬上之樂。（『通典』卷一四四「樂」）
段安節『樂府雜錄』（中国古典戲曲論著集成一，中国戲曲出

- 版社、1980)「琵琶」の條にも「始自烏孫公主造，馬上彈之」とあるが、『続談助』（『粵雅堂叢書三編』所収）卷一に引く段安節『琵琶録』には「漢遣烏孫公主，念其行道思慕，使知音者馬上奏琵琶以慰之」とある。
- 32 唐詩の引用は全て中華書局排印本『全唐詩』（1990）による。
- 33 日本語訳は、黒川洋一『杜甫』（『中国詩人選集』所収、岩波書店、1979）、中国語の注は、韓兆琦編著『唐詩選注集評』（文津出版社、2000）に拠る。
- 34 趙次公はこのあとに石崇の「明君詞序」を引き、「詳味此序，則馬上彈琵琶者，乃所送昭君之人也，豈昭君自彈邪」と、先に宋詩のところで挙げた王楙や程大昌と同じ意見を述べている。
- 35 これについては、金文京「『王昭君變文』考」（『中国文学報』第50冊、1995）に次のような指摘がある。「當時，琵琶の伴奏による王昭君の語り物が盛行していたことは，杜甫や吉師老の詩に見える通りである。」
吉師老の詩は次の通り。
妖姬未著石榴裙，自道家連錦水濱。檀口解知千載事，清詞堪嘆九秋文。翠眉顰處楚邊月，畫卷開時塞外雲。說盡綺羅當日恨，昭君傳意向文君。
（『看蜀女轉昭君變』『全唐詩』卷七七四）
- 36 引用は、金文京「敦煌本『王昭君變文』校注」（『慶応大学言語文化研究所紀要』24、1992）に拠る。この他、『王昭君變文』については以下の書を参照した。
潘重規『敦煌變文集新書』（文津出版社、1984）
堀江恭子『王昭君』（白帝社、2003）
- 37 拙稿「唐代文人と『琵琶』——白居易とその周辺——」（『愛知教育大学研究報告』53、2003）
- 38 劉希夷については「善彈琵琶」（『太平広記』卷一四三）、王維については「性閑音律，妙能琵琶」（『太平広記』卷一七九）とある。
- 39 引用は瞿蛻園『劉禹錫集箋證』（上海古籍出版社、1989）に拠る。
- 40 朱炯遠は「『琵琶行』與文化積淀」（『唐代通俗詩研究』所収、巴蜀書社、2001）で、白居易の「琵琶行」の成立に最も貢献した詩としてこの「秦娘歌」を挙げる。
- 41 朱金城箋校『白居易集箋校』（上海古籍出版社、1988）に拠る。引用も同書に拠る。
- 42 王安石「胡笳十八拍十八首」（『全宋詩』卷五七四）の第四首に「……明妃初嫁與胡時，一生衣服盡隨身。眼長看地不稱意，同是天涯淪落人……」、また、第五首に「十三學得琵琶成，繡幕重重卷畫屏。……如今正南看北斗，言語傳情不如手。低眉信手續續彈，彈看飛鴻勸胡酒」とある。
（平成15年9月11日受理）